

## ピーナッツ漫画と英会話

大阪大学名誉教授 長谷川 晃

### はじめに：

今回は、随分以前の話になるが、私がフルブライト留学生として初めてアメリカを訪れた、1961年の話をしよう。古い話だが、話の内容はこれから米国留学を考えている若い人達の参考になると思ってこの文を書いている。私が、米国留学を控え、生きた英語を話せねばならないと思い、通訳のアルバイトを買って出たりして実地に喋る訓練をしていた頃、一番参考になったのが漫画ピーナッツである。登場人物は、ご存知、主人公のCharlie Brown、友人のSchroeder、それに年下の子供、Linus、その姉のLucy、それに子犬のSnoopyらだ。当時は今ほどこの漫画は知られてなく、英文毎日に連載されていたものを切り取って集めていたものだ。

Peanutsは著者のCharles Schulz氏が1950年代に新聞に書き始めた4コマ漫画だ。出版当初のものはちょっと幼稚なものだったが、私が読み始めた1955年頃には結構洒落た大人の読み物になっていた。1961年にフルブライト留学生として何もかもが驚きのカリフォルニア州バークレーの町に到着した。半年ほどは夢中で当地の生活に慣れるのに懸命だった。こんな時に大変助けになったのが漫画Peanutsである。その頃には単に英会話のテキストとしてだけではなく、アメリカ社会の本質的な姿を知る上にも大いに参考になった。当地で、PeanutsはSan Francisco Chronicle紙にも連載されていたが、すでにペーパーバックの単行本が出ていたので買い集めて読んだものだ。

翌年の1962年に、カリフォルニア大学の心理学のSmith教授のおかげで家内もバークレーに来ることができ、そこで実質的に新婚生活が始まった。家内にもPeanutsを英会話のテキストとして勧め、二人ともこの漫画の愛好者となる。ある時、著者のSchulz氏が近くのSepastopolの町に住んでおられることを知り、電話をかけ、日本から来てU. C. Berkeleyで学んでいるいるPeanutsの愛読者だがというと「よかったら遊びに来なさい」という思いがけない返事があり、早速尋ねて行った。今回はこうした話を交えPeanutsがいかに英会話の参考になるかの話をしよう。

### 1. 米国留学前の英会話練習

日本の学校で習う英語は生きてない。これは少しアメリカ人たちと話すとわかる。昨今は生きた英会話を習う場所も増え、ネット上のテキストも豊富になったが、Peanutsでみる英会話は生きているだけでなく、面白い。ここではまず、1950年代のPeanutsからいくつかの実例をあげてその意味を紹介しよう。まず引用文献だが、“Celebrating Peanuts 60 Years”という分厚くて立派なPeanuts全集がAndrews McMell Publishing, LLC, Kansas City, Sidney, London (2009) から出版されているのでPeanutsの集大成としてオススメしたい。この本は1950年代から2000年にSchulz氏が亡くなるまでの作品を集大成したものでほとんど全ての作品が収められ、10年毎に解説がつけられている。私が英会話の参考にしたのは1950年代後期のものだが、Peanuts連載の始まった50年代初期のものに比べ、この頃には内容が格段にsophisticateされ、大人の読み物としても面白くなって来る。登場人物もCharlie Brownの妹のSallyが誕生し、歩くとバビロニア時代からのゴミに塗れるPig-pen, snoopyの友人の小鳥などが登場し、同時に名前を出てこない数人の男の子と女の子も登場するようになる。この頃Peanutsから学んだ英会話の表現を思い出すままに紹介しよう。

主人公のCharlie Brownは普通によくある少年で、どちらかといえば鈍臭く、一生懸命真面目にやるのだが、風揚げなど、必死でやればやるほど失敗する、野球ではキャプテンで頑張るのだが、他の選手の子供達が協力してくれない、結果いつも敗戦、それでもめげずに繰り返す。彼はいつもGood Griefと言って嘆く。人は彼のことをWishy Washy (優柔不断)と呼ぶ。

Wishy-Washyの例として、Charlie Brownの算数嫌いの表現にI am at best in something where the answers are mostly a matter of opinionというのが出てくる。Charlie Brownは答えがちゃんと決まっているような科目が苦手であった。私はこの漫画を通じて初めてPizzaやHalloweenのことを知ることになる。Charlie Brownがいつも信じるサンタに書く手紙

でThere are so many things I would like to say to you, but I find it hard to put them in writing. という表現を使う。そして友人の意地悪Lucy姉さんは彼のことをいつもBlockhead(まぬけ)と呼ぶ。妹のSallyが誕生してCharlie Brownも兄としての自負と責任感を持つようになる。LinusはこれをIt's just liable to (多分…にする) make him into a new personと喜ぶと、姉のLucyはI can think of nothing in all the world more obnoxious (いやで気に障る) than well adjusted (分別のある) Charlie Brownなどと言って皮肉る。これに対して弟のLinusはDon't pay any attention to Lucy, why if I listened to her I'd have been a nervous wreck (神経衰弱) a long time ago. と慰める。Lucyは自他共に許すFussbudgetである、fussyはよく使える言葉でその意味はうるさいお節介焼き、'showing excessive or anxious concern about detail'の意味を持つ。Fussbudgetはfussyな人物のことを言う。このLinusはいつも子供がよく抱えているようなぬいぐるみの代わりに毛布、security blanket (安心毛布) を持ち歩く、意地悪姉さんのせいかもしれない。そしてハローウインの時にはGreat Pumpkinが現れ、信じる子にプレゼントを持ってくると確信している。

図書館で借りた本が見つからなくなって大騒ぎするCharlie Brownに対し女の子たちは盗んだのだからとか言っていじわるする。本人は家中を探し回るが見つからない、こんな時のCharlieの言葉、'I will come to the library and turn myself in'と言う。Turn myself inとは自首すると言う意味で大袈裟な言い方で子供の罪の意識を表現。1週間ばかりこの騒動が続いてやっと本が見つかった時のLinusの言葉、'In all the world there is nothing more inspiring than the sight of someone who was just been taken off the hook'と呟く、Take off the hookという表現は、重荷が取れると言う時によく使う。その他に、そうだ！はThat' it! 気が重いはpent-up emotion, 怒り狂うことはfire up insideなど。Peanutsの漫画を読んでいくと日常によく使われる言葉を無数に習うことができる。

## 2. シュルツ氏との面会

電話で快く面会を承諾し、ご自宅に招いてくれたPeanutsの著者、Charles Schulzさんを訪ねて、買ったばかりの中古のフォードを運転してBerkeleyから100kmほど北西にある町、Sebastopolを訪ねて行ったのが1962年の春過ぎだった。氏は快く迎え入れてくれ、ご自身の書斎に通してくれた。そこで、私はPeanutsの漫画は日本にいた頃から大好きで、おかげ

で英会話の勉強ができたことなどを話した。書斎では犬小屋の上で寝そべるSnoopy, security blanketを左手に抱え右手の親指をしゃぶるLinus、それにCharlie Brownなど3枚ほどの絵を鉛筆で下書きし、その上に黒インクでなぞって大変丁寧に描いてくれた。そして、お父さんが散髪屋だったこと、彼自身の幼い時のイメージでCharlie Brownを描いたことなど話してくれた。この時の書斎での写真を入れておく。



1962年、若き日のCharles Schulz氏

その後、プールのあるご自宅に広い庭に出てお子さんたちと一緒に写真を撮らせてもらった。その時は近所のお子さんかと思って聞かなかったが、ひょっとしたら養子に迎え入れた子どもたちだったかもしれない。



Schulzさんとお子さんたち

庭では我々とも一緒に写真に入ってもらった。短い訪問だったが、気さくに御自身の生い立ちなども含め、いろんな話をしてくれたのを覚えている。温和で、素晴らしいお人柄だった。

私はその後もずっとPeanutsを愛読し、家では子供達もファンとなり、家族ぐるみでPeanutsを愛した。引用文献にあげたSchulz作品大全集は最近娘が私の誕生日にカナダから送ってきてくれたものだ。



Schulz氏は2000年2月に最後の場面をいろんな登場人物の思い出の一コマ漫画に描いて遺作とし、姿を消した。その時彼の言葉を転記しておこう。

Dear Friends; I have been fortunate to draw Charlie Brown and his friends for almost 50 years. It has

been the fulfillment of my childhood ambition. Unfortunately I am no longer able to maintain the schedule determined by a daily comic strip. My family does not wish Peanut to be continued by anyone else, therefore I am announcing my retirement. I have been grateful over the years for the loyalty of our editors and the wonderful support and love expressed to me by the fans of the comic strip. Charlie Brown, Snoopy, Linus, Lucy...how can I ever forget them. Charles Schulz.

### 3. 漫画にみる米国社会

漫画Peanutsは、あまり誰もが取り上げてないが、米国社会の面白い一面を表していると思っている。それは男の子と女の子の表し方の違いである。男の子たちはCharlie Brownを始め、ピアノに夢中のSchroeder, security blanketを抱えているLinus, 砂埃だらけのPig-Penら、みんなそれぞれの個性と才能もっている。Charlie Brownは何事にも真面目に取り組み、不器用だが、何度失敗しても失敗しても諦めずにやり通す、それでもうまくはゆかない。これに対し、Schroederは音楽家としての天才肌の持ち主で、いくらLucyが誘いかけても相手にせず、ピアノを弾き続ける。Linusは意地悪姉さんLucyとの軋轢を避けるためにいつも毛布を抱えているが、反面非常に繊細な感情の持ち主だ。これに対し、女の子のLucyは単純で意地悪で、なんでも知ったかぶりをし、命令口調でものを言う。他の女の子たちも、天然パーマを自慢する女の子、名前をもたない他の女の子たちも、言うことが単純で考えが浅い。表面的で面白くない。Charlie Brownが密かに想いを寄せる幻の可愛い赤毛の女の子は具体的には登場しない。この意味でPeanutsは性差別の面を持っている。にも関わらず、性差別でうるさいアメリカ社会でこのことが問題視されたことは聞かない。それは多くの読者がこれらの事実を暗に認めているからではないからだろうか？

(通信 昭和32年卒 34年修士)